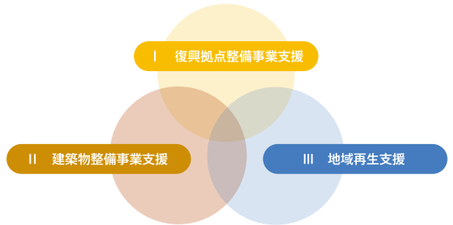
大熊町　大川原地区

東日本大震災からの復興支援

原子力災害被災地域での復興まちづくり

全町避難を余儀なくされた
原子力災害被災地域におけるURの支援

福島県では、地震・津波に原子力災害が重なる未曾有の複合災害が発生。福島第一原子力発電所の事故により放射性物質が放出され、県内12の市町村に避難指示が出されました。町民・経済活動がゼロになった地域は、避難の長期化等によりすべての住民の帰還は望めず、復興は困難な状況です。そこでURは、全町避難からの復興を目指す大熊町、双葉町、浪江町について、以下の三つの柱を掲げ、ハード・ソフト両輪で復興支援を進めています。



Ⅰ 復興拠点整備事業支援

住民生活や地域経済の再建の場となる復興拠点を整備するため、基盤整備の基本構想や基本設計工事実施から事業実施までの支援

Ⅱ 建築物整備事業支援

建築工事等の基本構想・基本計画検討から設計及び工事の発注手続き、その品質・工程・コスト管理等の支援

Ⅲ 地域再生支援

持続可能な地域社会の再生のため、交流人口・関係人口の拡大等に関するソフト面での施策等の支援

福島県大熊町

福島復興再生のシンボルとして
先行して復興事業をスタート

原子力災害被災地域における復興拠点第一号として整備された大熊町の大川原地区。大熊町が用地買収、施設建築物の整備主体となる一方、県が町営住宅の整備を代行、URが基盤整備工事や施設建築物整備の技術的支援を行い、3者協力して整備を進めました。その結果、2019年4月の避難指示解除に合わせ、役場庁舎の開庁、町営住宅の入居開始、初の住民帰還が実現。一方、2017年11月には町の中心部であったJR大野駅周辺が除染やインフラ整備を先行的に進める「特定復興再生拠点区域」に定められ、URは当該区域内の下野上地区において、2020年度から復興拠点整備事業支援等を進めています。

地域活動拠点KUMA・PRE（クマプレ）

2022年2月には、地域内外の様々な人が集い・つながり・試行する場として地域活動拠点KUMA・PRE（クマプレ）を設置。地域関係者を巻き込みながら、関係人口の拡大や大野駅西地区の賑わい創出に向けた様々な実証を行ってきました。

双葉町　双葉駅西側地区

福島県双葉町

復興の第一歩として、
「住む拠点」に先駆けて「働く拠点」を整備

双葉町は、福島第一原子力発電所の事故による避難指示が出された被災12市町村の中で、最も避難指示解除が遅かった町です。2022年8月に特定復興再生拠点の避難指示が解除される前に「双葉町復興まちづくり計画（第二次）」を策定し、まず「働く拠点」として「中野地区」を計画しました。その後「住む拠点」として「双葉駅西側地区」を計画、2022年10月には公営住宅の入居を開始することができました。避難指示解除から2年が経過しましたが、双葉町に居住している人は震災前約7,000名に対し200名ほどです。

双葉町産業交流センターでの「ちいさな一歩プロジェクト」の賑わい・交流イベント

そんな中、双葉町の賑わい再興の実現に向けて動き出したのが「ちいさな一歩プロジェクト」。URや双葉町がまちづくり会社、地域で活動する人と連携し、空き地や空き店舗等を活用しながら人の流れをまちに生み出し、関係人口の拡大や移住定住を促しています。

福島県浪江町

「まちの顔」としての賑わい復活のため、
浪江駅周辺のまちづくりが始動

浪江町は、地域経済の再生に向けた整備を進めています。なかでも、当地区を雇用創出エリアと位置付け、浜通りの新産業創出等に向けた「福島イノベーション・コースト構想」等に基づく先端産業拠点の形成を目指し、整備を行っています。URは、当地区で基盤整備工事を受託し、インフラ工事との施工調整により工期短縮を行ったほか、整備した土地の段階的な引渡しにより、早期の施設立地を促進しました。

浪江駅周辺グランドデザイン基本計画　駅前のイメージ（出典：浪江町）

また、かつての中心部として栄えていた浪江駅周辺の賑わいの再生に向けて、町は「浪江駅周辺グランドデザイン基本計画」を策定。URは、基盤整備工事を受託し、2024年度から本格的に工事がスタートしました。このほかにも事業の円滑な推進に向けて、「交流機能」「居住機能」「商業機能」等の具体化に向けた助言・提案等を行うなど、総合的に支援しています。